

編集部より Editorial

JLSR編集長 邨次 誠

Makoto MURATSUGU, Editor-in-chief, JLSR

BZ 反応¹という現在では“市民権”を得ている周期的に振動する化学反応がある。Boris Pavlovich Belousov が TCA 回路の研究をおこなっているときに発見した反応で、ある論文誌に投稿したが、「ありえない」という理由で却下されてしまった。最終的に Belousov が所属する研究所の紀要 (Annual Assay of Radiobiology, 1957) に掲載された²。紀要の存在価値はまさにこの点にあると思う。

短大部³も含めて紀要の発刊に約14年間 (1997-2004, 2003-2005, 2010-2014) 係わってきた。短大部の紀要は1995年に創刊され、その2年後に編集委員会に加わった。その当時、ある投稿論文のことが話題となっていた。「測定結果が得られたが意味のある結果とならなかった。その原因は測定器がよくなかった」というような結論の論文で、受理しない方向で対応したとのことであった。この種の論文は当然却下されてもいたしかたないであろう。真摯に実験がおこなわれて得られた結果がその時代の主流の考え方に反するものとなれば、そのような論文は往々にして却下されることが多いと思う。しかし、このような論文こそ最後に発表できる場として紀要が存在していると思う。紀要は、学生の練習のためにあるとか、研究機関の顔であるとか、醜悪と思うが論文数を増やすためにある、といったような考え方もあろうが違うように思う。

2003年、短大部は4年制大学⁴に移行した。それに伴い紀要も新しくすることになった。将来組織名が変わっても論文誌として末永く使用できるような誌名⁵に変更し、「巻」は短大部紀要からの通しにすれば、将来価値が出てくると考えられたが、「“通し”にすると4年制大学の紀要でなく価値が下がる」といったようなことで誌名のみの変更となった。いまだに納得のいかない考え方と思っている。

2011年、紀要を紙媒体で発行するのではなく、オンラインジャーナルのみとしウェブサイトで公表することにした。そして研究成果を英語で執筆すれば世界中の人々に研究成果を示すことが可能となった。それに伴い外部から論文内容について厳しい指摘も届くようになったが、すばらしいことと思う。そしてウェブサイトでの公表を契機に誌

名を2つに分けることにした⁶。これは、さまざまな分野の研究者がいる研究機関で研究成果を発表するには、これらの研究分野を包含できる誌名が望ましいと考えたからである。発表したものは未来永劫残るのであるから、至極当然のことであろう。そして、投稿論文の内容を理解できる者がそれぞれの論文誌の編集長を務め、編集委員もその分野の研究者が担当することが望ましい。そうしなければ曖昧模糊とした評価をおこなうことになり、2014年社会を騒然とさせた論文問題に発展することにもなるであろう。

投稿者は機関所属者のみに限るべきとの議論もあった。おそらく機関の費用を使っているから、とのことが大きな理由と思うが、学問に国境はないとの精神から、機関外の研究者の投稿も大いに歓迎している。ある国立大学に投稿規程・原稿執筆要領を送ったところ、その大学の博士論文審査委員会から本誌への掲載論文は博士論文の参考論文としてもよいと判断をされた。これは特筆すべきことであった。

世の中には、論文数を増やすために学会を作るようなことがあると聞く、またとにかく受理してくれるようなジャーナルにのみ投稿するといったこともささやかれている。大学という教育機関でこのような考えに立つ指導者が増えれば、その分野のレベルはどんどん低下していくであろう。BZ 反応の初期論文のような論文を掲載できれば、編集に係わる者として至福の喜びである。

注

- 1 Belousov-Zhabotinsky 反応
- 2 三池秀敏, 森義仁, 山口智彦 非平衡系の科学 III 反応・拡散系のダイナミクス, 講談社サイエンティフィク, 東京, 1997, p.14
- 3 大阪府立看護大学医療技術短期大学部
- 4 大阪府立看護大学総合リハビリテーション学部
- 5 Journal of Rehabilitation and Health Sciences (JRHS)
- 6 Journal of Life Science Research (JLSR) (誌名の命名にあたっては、出来る限り違和感がないように配慮した。)